

## 令和4年度第1回北海道総合教育会議 議事録

### 1 日時

令和4年8月22日(月)午前10時30分開会

### 2 場所

ホテルポールスター札幌 2階 セレナード

### 3 構成員の出欠状況

#### (1) 出席

鈴木知事、倉本教育長、橋場委員、青山委員、川端委員、大鐘委員

#### (2) 欠席

渡辺委員

### 4 会議に出席した有識者等

一般社団法人 十勝うらほろ楽舎 代表理事 近江 正隆 氏

当別高等学校 地域コーディネーター 松岡 宏尚 氏

### 5 議題

地域を支える人材の育成

### 6 議事

別紙のとおり

## ○事務局（藤原総務部長）

それでは、定刻になりましたので、ただ今から、令和4年度第1回北海道総合教育会議を開催いたします。私、総務部長の藤原でございます。よろしくお願いいたします。

なお、本日は渡辺委員が欠席となっておりますので、お知らせいたします。

まず開会にあたりまして、知事からご挨拶申し上げます。

## ○鈴木知事

皆さんおはようございます。北海道知事の鈴木直道でございます。

こういったオンラインではない形で、皆様と集まっての総合教育会議は3年ぶりでございます。まずは開催にあたって一言ごあいさつを申し上げます。

教育委員の皆様、そして本日は大変お忙しい中ご講演をいただきます十勝うらほろ樂舎の近江代表理事、事例報告をいただきます当別高校の松岡地域コーディネーター。本当に大変お忙しい中、本日、ご出席をいただきました皆さんに心から感謝を申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が長期に渡る中、教育活動には様々な影響が生じております。そういった中、子ども達の命、健康、そして学びを守るために、大変なご尽力をいただいている教職員の皆様をはじめとして、ご家庭、地域、教育関係の団体の皆様、そして各教育委員会の皆様には深く敬意を表します。

本会議でございますが、知事、そして教育委員会が相互に連携をして、より良い教育行政を推進していくため毎年開催させていただいているものでございます。

本日、重点的に講ずべき施策といたしまして、「地域を支える人材の育成」をテーマとして開催させていただきます。全国を上回るスピードで人口減少そして少子高齢化が進行する北海道におきましては、人手不足がもたらす地域産業の停滞が他の県以上に懸念されている状況でございます。本道の産業・社会・文化を将来にわたって守り、そして発展させていくために、次の世代を担う人材を大切に育てていく。このことは何よりも重要になってまいります。

本日は道教委の「地学協働活動の取組」についてご報告をいただきますほか、先ほど申し上げました十勝うらほろ樂舎の近江代表理事から貴重なご講演をいただく予定となっております。

十勝うらほろ樂舎におきましては、生きるチカラが育む「ひとづくり」、そして次世代に引き継げる「まちづくり」、活動を持続可能にするための「資本づくり」という三つの要素を大切に、アスリートや企業など、道内外の様々な皆様とタッグを組んで、地域が輝くための人材育成に注力をされているとお伺いしております。近江代表理事のお話も参考にさせていただき、委員の皆様とともに活発に意見交換をさせていただければと思いますので、本日は皆様よろしくお願いいたします。

## ○事務局（藤原総務部長）

ありがとうございました。本日の議題は「地域を支える人材の育成」としております。ただいま

知事からも話がありましたが、現在の社会情勢を背景に、前例にとられない新たな発想と行動力を持つ人材の育成が必要であり、将来を担う子ども達の可能性を引き出す教育の推進が求められております。

本日は知事と教育委員会の皆様に加えまして、一般社団法人十勝うらほろ樂舎の近江代表理事に専門的な見地からご講演をいただき、議論を深めてまいりたいと考えているところでございます。

それでは議事に入らせていただきたいと思います。議長は鈴木知事にお願いいたします。

### ○鈴木知事

はい。それでは議長を務めさせていただきます。本日は改めてよろしくお願い申し上げます。先ほど申し上げましたとおり「地域を支える人材の育成」をテーマに本日は皆様とお話をさせていただきます。

それでは、協議してまいりたいと思います。はじめに、倉本教育長及び当別高校の松岡地域コーディネーターから、「地学協働活動の取組」についてご報告をお願い申し上げます。

### ○倉本教育長

おはようございます。

それでは「地学協働活動の取組」につきまして、ご紹介をさせていただきます。まず①と②について私から、③を松岡地域コーディネーターから説明をしたいと思います。

道教委では昨年度より、地域と学校が相互にパートナーとして連携協働する取組を「地学協働」と称しまして、地域と学校が Win-Win の関係を構築することを目指しています。その実現に向けた取組の一つとして、高校生と社会人が一緒に地域課題を解決する地域課題探究型の学習体験を行い、地域の未来を担う人材の育成を目指す「北海道 CLASS プロジェクト」事業を進めております。この事業は8校を高等学校研究指定校として設定いたしまして、その中の推進校4校に地域コーディネーターを配置いたしまして、地域と学校を繋ぐ役割を担っていただいております。

「北海道 CLASS プロジェクト」の「C」「L」「A」「S」「S」、「CLASS」は、プロジェクト実施の鍵となる「コラボレーション」「リテラシー」「アダルト」「ステューデント」「システム」という5つの観点の頭文字を取ったものでありまして、それぞれの研究指定校において重点を定め、各地・各校の特色を活かした学習活動を展開しております。

本プロジェクトにおいて、地域コーディネーターが大きな要となっております。地域コーディネーターが学校と地域の想いを双方に伝えまして、生徒と地域人材が、学校と地域を行き来する機会を創出することで両者の距離を縮め、「まち・ひと・しごと」と「学び」の絆づくりを目指しております。

研究指定校における取組事例をいくつかご紹介させていただきます。上段にあります本別高校では、地域課題解決に向けて、町内の名産品を使用したレトルトカレー、これは大豆や豚

肉ですが、そのレトルトカレーを地元農協と共同開発しまして、インターネットや道の駅で販売するなどの商品化までを実現しました。また、下段にあります白老東高校では、フィールドワークをする中で地域の課題を探り、地元商店街活性化に向けたマップ作りや、PR 動画の製作に取り組みました。

夕張高校では、地元企業とタイアップをして、地域の特産品のパッケージデザインを考案、市のふるさと納税の返礼品にも採用されております。また、豊富高校では、高校生目線での地域活性化に向けたアイデアを町の議会に提言しております。これらの取組では、高校生が地域の関係者の方々などとの対話を通じまして、地域の課題に自分事として向き合い、地域コーディネーターが橋渡しとなっていただき、多くの方々との関わりを持ちながら、課題解決方策を考える。こうした学習活動を行っております。

続きまして、農業・工業・商業・水産、いわゆる職業学科を持つ高校におきましても、地学協働活動が行われております。その一例として、高校生による商品開発、そして「マイスター・ハイスクール」事業の2つをご紹介させていただきたいと思っております。

まず、高校生による商品開発の事例ですが、千歳高校における商品開発です。千歳高校は普通科、外国語科、商業科を配置しております、マーケティングの学習に力を入れております。昨年は商業教育を学ぶ部活動、ビジネススタディクラブ、「BSC」という名前を持っておりますが、ここにおきまして地元の企業である「天のびろく」とのコラボ商品を開発しまして、地域のイベントで販売したほか、千歳市のふるさと納税の返礼品にも採用されまして、市の PR に貢献をしております。

こうした地元企業などと連携した消費活動の取組は、他の高校でも積極的に行っております。例えば商業高校では、一例ではありますが、パンやお菓子、石けんやソーセージ、飲料水やケーキ、またスイーツなど、それぞれに特徴ある商品づくりに取り組み、ご協力いただける店舗やイベント、インターネットなどを通じた販売にチャレンジをしております。

また、農業高校では、自校で飼育栽培した家畜や作物を活用したソーセージや、あるいはお酒づくり、アイスクリームやフレグランスの開発などを通して、様々な方や企業などにご協力いただきながら、農産物の高付加価値化を学んでおります。

次に、スライドの12になりますが、マイスター・ハイスクール事業でございます。これは産業界と職業学科が連携をして、地域の持続可能な成長を牽引する最先端の職業人材の育成に取り組む事業でありまして、文部科学省の委託事業としまして、本道では現在、静内農業高校と水産高校の厚岸翔洋高校が取り組んでおります。

今回は、静内農業高校の取組をスライドに示させていただいておりますが、企業・法人・大学・行政が連携をしてマイスター・ハイスクールビジョンとして掲げた、例えば地域や産業界が連携した実践的・体験的な学習会の推進など、①から⑥にありますような活動を行いまして、下の枠内に示しておりますが、地域創生の担い手などの人材育成を目標に取り組んでおります。

スライドの13ですが、具体的には、食のマーケティング或いはeコマースによるビジネスモデ

ルや食品輸出に関する学習、地域園芸の特性と栽培技術の学習或いは、馬の蹄に関する学習など企業や行政等の関係機関と連携しまして、様々な取組を行っております。

スライドの14ですが、今年度は学校設定科目として、商品開発を設置しまして、新ひだか町まちづくり推進課のコーディネートのもと、地元の事業者と食品科学科の生徒が協働で新ひだか町の特産品を開発する取組を行っているところであります。以上、職業学科での地学協働活動に関する取組の一端をご紹介いたしました。

続きまして、冒頭でお話しました「北海道 CLASS プロジェクト」の研究指定校である当別高校において、地域コーディネーターを務めていただいている松岡様よりコーディネーターの取組の現状について、ご説明していただきます。

### ○松岡地域コーディネーター

おはようございます。

ここからは、私から地域コーディネーターの事例発表をさせていただきます。

このような発表の内容となっております、少し駆け足となっておりますがよろしく願います。

まず簡単に、自己紹介をさせていただきます。当別町生まれ・育ちの現在34歳で、28歳で地元に戻り、現在の仕事のほか、JCをはじめとした地域活動をしたり、また学生でもあります。

次に本題の「CLASS プロジェクト」についてですが、当別高校では地元での入学者が少ないことや、地域資源をカリキュラムに活用しきれていないことなどを課題として、当別独自の持続可能な地域づくりの担い手の育成を目指し総合的な探求を軸とした「CLASS プロジェクト」が始まりました。

プロジェクト当初については、短期間での土台構築が必要でしたが、現場の先生からは賛同が得られていないイメージもあり、特に印象深かったのは、会議中でも帰られる先生がいらっしまったことがあるなど、様々な課題がある中でスタートしたと記憶しております。

その中でこれまでは、先生の理解をいかに得るかという点、そして学びの機会を地域の大人といかに作るかというところを、カリキュラム作成と並行して一人一人との面談などによって理解を得られるよう取り組みました。

そして何とか今年4月より本格的にスタートしました。本当にスタートして良かったなと思っておりますが、4月から7月まで、ご覧のように地域の方に来ていただいたりフィールドワークで訪問したり、また地域の協力のもと、ファーストステップとして当別を知ってもらうというのを全体的に行っております。

地域連携についてですが、2月よりコンソーシアム会議を発足しました。メンバーとしては、当別町役場や JA、商工会、中学校の校長先生や大学など町内の方々に参画いただきまして、さらに町外連携としては石狩振興局さんにも参画いただき、現在は北海学園大学さんとの連携事業も進めております。

また、学年ごとに事業を行っていることから、先生や生徒自身も他で何をやっているのか分

からないので、学校内の情報共有として先生方が使っているクラスルームに入れてもらい活用をスタートしております。

取組の成果ですが、まだ半年ということもあり、目に見えるのものは多くはないなと思っております。

一・二年生の生徒にとつたアンケートをご紹介します。ここでは、「当別高校に入学して良かった」や、「当別町に魅力を感じる」という設問を例に挙げていますが、カリキュラムの実施が多い一年生が二年生と比較して、ほとんどの設問でポジティブな結果となっております。これは先生方の賛同を得る契機にもなっていて、事業評価の定点観測として定期的に行っていく考えです。

また、地域型の新たな成果としては、生徒の約半分が就職希望者ですが、これまで町内企業への就職はほとんどありませんでした。実は町内企業側は「どうせ来ないだろう。」とあって、そもそも求人をしていなかったというミスマッチが起きておりました。そこで町内企業にアンケートを実施したところ、採用したいという企業が21社あることがわかり、来年度、町内での合同説明会や個別のインターンも計画しております。

課題ですが、実際、総合的な探求の授業時間だけでは足りないと思っております。そのため他の科目との連携が必要になり、忙しい先生方の理解と協力が必要になりますが、当別高校は今年一問口減りそうなところで、少し厳しくなりそうと感じております。ですが、できる限り地域の大人に協力してもらい、いろいろな機会を作っていきたいと思っております。

今後取り組みたい内容としては、画一的なカリキュラムではなく、選択肢を作った上で生徒自身が選び、主体的に取り組むことができる授業体制です。資料では例を3つ挙げております。また、課外活動になりますが、地域の大人が行っているプロジェクト、青年会議所等でもいろいろな事業を行っておりますが、そこへのオブザーバー参加や参画をもって学びの機会にできたらいいと思い準備を行っております。

ゴールは生徒がどこかで、当別高校に来て良かったと思ってもらえることです。僕自身この授業はすごいポテンシャルを持っていると思っていますので、引き続き頑張っていきたいと思っております。ご清聴ありがとうございました。

## ○鈴木知事

はい。倉本教育長、そして松岡地域コーディネーターありがとうございました。

それでは次に、十勝うらほろ樂舎の近江代表理事からご講演をいただきます。ご講演に先立ちまして、事務局から略歴をご紹介します。

## ○事務局（成田総務部教育・法人局長）

はい。近江様の略歴をご紹介します。

近江様は東京都のご出身で、平成元年に都立戸山高等学校を卒業した後、北海道に単身移住をされ、平成3年から浦幌町で漁業に従事されました。漁業の傍ら、水産加工品のインタ

ーネットショップを運営された後、地域活性化や教育事業に積極的に取り組まれておられます。

現在は、一般社団法人十勝うらほろ楽舎代表理事のほか、株式会社ノースプロダクション代表取締役、NPO法人食の絆を育む会理事長、NPO法人うらほろスタイルサポート理事に就任をされ、次の世代を担う人材の育成や、持続可能な地域づくりをはじめ、様々な事業にご尽力をされております。

また、平成30年からは北海道社会教育委員、令和3年からは北海道教育推進会議高等学校専門部会委員を務められ、本道教育の推進にも多大なご貢献をいただいております。以上でございます。よろしくお願いいたします。

## ○鈴木知事

それでは、近江代表理事よろしくお願いいたします。

## ○近江代表理事

本日はよろしくお願いいたします。

このような場で話をさせていただくのを大変光栄に思っております。ただ、あまり人前で話するのが得意ではないので、多少緊張しておりますが、どうぞ、よろしくお願いいたします。

今日のこのテーマで、私はこのようなタイトルをつけさせていただきました。「今、十勝うらほろで起こっていること。」、そしてサブタイトルとして「次世代に繋がる社会づくりへの協働のアプローチが関わる人たちの生き抜く力を育む!」と題させていただきました。よろしくお願いいたします。それでは資料を使って説明させていただきます。

本日のトピックスで3つほど話をさせていただきたいと思います。

まず、タイトルであります「今、十勝うらほろで起こっていること」そして、「次世代に繋がる社会づくりへの協働のアプローチが関わる人たちの生き抜く力を育む」ということ。そして「これからの展望」でございます。

皆さん、浦幌町に来られたことはあるでしょうか。恐らく道内の中でも、一番地味で目立たない地域なのではないかと、住んでいる我々も感じているところです。実はそんな浦幌町で、今、こんなことが起きております。

実はこの3年間で、20代の若者の転入者が転出者を34名上回っている。「えっ、浦幌町でそんなことが起きてるの」と普通は皆さん思われるのではないかと思います。これは6月の町議会で町長が答弁された内容からの抜粋ですが、その要因として、「関係人口という意味で様々な人材が来ている。「うらほろスタイル」から派生した事業も要因だろう」と述べておられて、今日はこの「うらほろスタイル」を中心に話をさせていただきたいと思っております。

「うらほろスタイル」、30年で人口が半減した浦幌町が予算組みした取組です。浦幌高校廃校の危機感から16年前にスタートしました。町内の小・中学校を中心に、学校を軸とした、子ども達を軸とした、持続可能なまちづくりプロジェクトだと言えます。地方創生における教育、義務教育レベルの地方創生が教育の先導モデルとして文部科学省や内閣府、また研究

機関からも高く評価をいただいております。結果として、子ども達の自己有用感、自己効力感の向上にも寄与しているのではないかと評価をいただいているところです。

この「うらほろスタイル」のように、地域の様々な人や組織が子ども達と関わる関係性や仕組みを国も横展開しようと、私は別会社を持っているんですが、そこで委託を受けまして、学校の先生と地域住民が協働意識を育むための研修プログラムを開発させていただきました。「地域みんなで子供達の未来を考えるワークショップのすすめ」というものを開発させていただいておりまして、現在もコミュニティ・スクールを進める上での初動で大事だということで文部科学省のホームページからもダウンロードできるようになっております。

実際に「うらほろスタイル」の内容でございます。小中一貫の教育課程で行っている「うらほろスタイル」についてまず説明させていただきたいと思っております。具体的な取組例として、私が一番に挙げさせていただきたいのは小学5年生全てに行っている民泊体験学習についてです。

町内の農林漁業者宅に一泊二日の泊まり込みで生活体験をしています。作業体験を通じ産業理解を図るとともに、はじめて会う他者に、ありのままの自分を家族の一員として受け入れられる体験を通して、自らの尊厳を実感する機会になっていると思っております。そして中学3年生になると地域活性化への参画です。大好きな浦幌をより良い町にするための企画を大人達に提案してくれています。企画はそのあと想いを託され大人達が真剣に向き合い実現への道を切り拓いて行っています。

近年では、生徒達も企画の提案に止まらず、自ら実行に移す行動、ここでも大人達は生徒達に向き会い、生徒が自らの想いを実現するサポートをしております。

結果として一番下に書かせていただきましたが、親や先生以外でありのままの自分を受け入れて、本気で向き合ってくれる大人、つまり信じられる他人との出会いが愛着や自己肯定感、自己有用感、社会への当事者意識、地域への愛着の形成に繋がっているのではないかと感じているところです。

そんな小中学校の学校教育の中での礎の上に新たに展開しているのが、教育課程外で取り組む自主活動「浦幌部」であります。高校生の活動からスタートしました。きっかけは、高校が無くなってしまった浦幌ですが、「うらほろスタイル」を受けて育った高校生有志が中学卒業後も地元で活動したいという思いを持ったことから、平成28年にスタートしております。

当初はイベントを行ったり、文化祭で出店したりすることもありました。ただコロナ禍において、なかなかできなくなってきた中で、今は YouTube など SNS 発信をメインで行っております。

こんな高校生の姿を見ている中で、実際に中学生も「我々も浦幌部を結成したい」ということで、現在は中学生にもこの活動が展開しているところでございます。

この活動で出来た絵本は、2部しかございませんでしたので知事と教育長に渡させていただきました。後ほどご覧いただけたらと思います。よろしく願いいたします。

少しまとめてみました。教育課程外における、中高生の活動充実と若者へのアプローチであります。浦幌部の活動は中高生達の学びの視点からも、持続可能な町づくりの視点からも重

要だと思えます。このような学びを縦横に広げ、より充実させていくために、現在、他の部活動に打ち込んでいて時間的に参加が厳しかった中高生や、町外に進学し物理的に参加が厳しかった高校生の受け皿になれる緩やかな場の設定を行っております。

また、高校卒業以降の若者の活躍と浦幌部的な学びの機会の創造、それらの場や機会の情報を中高生や若者がどこにいても得ることができるとの仕組み作りを行わせていただいているところです。

現状の分析と課題ということで、こちらのうらほろスタイルの現在コーディネーターを担っている本間さんの方にまとめていただきました。

現状です。中高生が取り組む活動は自らの「好き」を入り口としている。そのため、各高校での学びや、中高生が教育課程内で取り組む地域活性化の活動等を横断しながら探求を自走している。既に当人達の中では、「授業の時間」「浦幌部の時間」「個人的な時間」の区別がなくなりつつある。これは今般、改訂・実施されている新教育課程で目指すべき姿の一つでもあると言えるのではないかと思います。

課題です。この状態を継続発展していくためには、教育課程内外を柔軟に横断し、中高生達の活動に寄り添える伴走者、大人達の存在が必要不可欠です。しかし教員の過重労働が社会問題となる今、教育課程外と横断する役割を教員、学校の先生達に求めることは難しいことだと認識しております。

これから取り組むべきは、中高生の興味関心に応じ、個別最適に地域資源と繋いでいくコーディネーターだけではなく、教員的な資質能力を持つ人材を、学校だけではなく地域として確保・発掘・育成・雇用し、本質的に機能するための位置づけを教育課程内外で行うことだと思っている次第でございます。

こんな16年間の「うらほろスタイル」、学校を軸とした活動の礎の上にこれから話をさせていただきます「十勝うらほろ創生キャンプ」があります。更なる持続の町づくりに挑んだ浦幌町の挑戦ということで話をさせていただきます。こちらの財源としては、内閣府の地方創生推進交付金と企業版ふるさと納税を活用しております。浦幌町の水澤町長が会長を務める協議会からの委託を受けて、私が代表理事を務めさせていただいております十勝うらほろ楽舎が、企業や副業型企業人などと新たな協働で事業を運営しております。地域おこし協力隊の制度も積極的に活用させていただいております。北大、北教大、筑波、APU の新卒の学生さんも、地域おこし協力隊という形で採用させていただいております。また、先ほど話させていただきました、16年経っております「うらほろスタイル」を卒業して、地域に愛着を持った若者達が地域に戻り始めています。その雇用の場、受け皿として、この創生キャンプ、そして我々十勝うらほろ楽舎がいるのが現状だと思えます。

続きまして、この十勝うらほろ楽舎、一般社団法人の説明をさせていただきます。一言で言うと様々な人材・企業が集いはじめる新たな協働モデルと思えます。この「うらほろスタイル」は私が30年前に東京から移住をしまして立ち上げさせていただきましたが、それに貢献したということで、この十勝うらほろ楽舎の代表理事にも就任させていただいております。副代表は元メル

ペイ取締役でフォレストデジタルという会社のCEOの辻木さん、北村林業及びバトンプラスの代表を務める地元の北村さん。理事には元ヤフーの「ミスター検索」と言われている神戸市CDO 補佐官で、現在、兵庫大学教授の宮崎光世さん、また元文部科学省 CS 担当の上田さん。ロート製薬で現在も営業マネージャーとして活躍されている、また、バトンプラスの取締役を担われている佐藤功行さん、元北海道コンサドーレ札幌の曾田雄志さん、大正大学教授の浦崎太郎先生、実動スタッフとしては文部科学省、オリエンタルランド、ワタミ、ロート製薬などからの転職者と、企業からの出向者で構成しております。地域内の若者や副業で関わる企業人も多数在籍していただいております。また東京や札幌などのふるさと納税寄附企業とも協働で事業を実施しているのが大きな特徴です。

十勝うらほろ樂舎をまとめさせていただきました。生きるチカラを育む「ひとづくり」、「まちづくり」、またこの2つを行っていくために我々は「資本づくり」に重点を置いております。なぜかという、今ではなく10年後、20年後の未来を想像したときに、本当にこれらのまちづくり・人づくりを、税金だけで賄うことができるだろうか、税金だけを当てにして本当にいいのだろうかという漠然とした課題感がありました。無いから諦めるのではなくて自分達で稼いでいく。稼いだお金を山分けにするのではなくて、このまちづくり・人づくりに還元していく仕組みを作っていく。そのためには稼ぐ力を持った企業や企業人の方達と連携していくというのが我々の趣旨でございます。

これは、16年間のうらほろスタイルの礎の上に出来ている本質的な連携スタイルだと自負しているところです。本質的な連携によるシナジー効果ということで、フォレストデジタル株式会社が浦幌町に誕生しました。副代表の辻木さんが代表を努めております。羽田空港にもこの開発した「没入自然空間 uralaa」というものが、デジタル森林浴という形で表現されています。また、浦幌町の林業者の方とロート、ヤフーの方達が副業で木材加工会社であるバトンプラスを立ち上げました。

また、シナジー効果②ということで、心から繋がる協働としてまとめさせていただきました。実際に心から繋がる協働が育まれてきた、このバトンプラスのチャレンジは、資本作りへの大きなヒントが満載されているというふうに自負しております。

また、関わる中で未来が自分事になる、関わる大人達が次世代に繋ぐ持続可能な社会づくりの当事者になり始めていると思います。大事なのは今の時代しか考えない形式的な連携ではなく、本質的な連携、今だけを考えない未来を思う次世代を中心に据えたまちを目指す、未来を想い、未来を見据えた本質的な連携だと思います。

分業化が進み、効率化が進む企業・都会では学べないことがたくさん地方にはあります。それらは非効率からの学びです。地域発のプロジェクトでは、一つの役割ではなく、全部を自分でやらなければならない環境となります。そして人や物事にじっくり向き合わなければ前に進めないという地域の環境は、関わる人達の洞察力を高めるきっかけになると思います。失敗してもいいと思います。そもそも過疎が進む課題山積の地域では何が正しいのかもわかりません。ある意味全てが正解であり、失敗も正解の一つだと思います。浦幌のような本質的な連携ができ

る土壌のある地域、丁寧な関わりができる地域は関わる人を育てると改めて思います。

実際にこの生きる力が育まれている協働のアプローチ、事例ということで2つ紹介させていただきます。一つ目は、ロート製薬から転職をした汰木くんがプロジェクトリーダーになって、今年の6月に進めることができました「うらほろマラソン」であります。構想から半年で実施にこぎつけました。企業×地域×アスリートで、コロナ禍の中で「うらほろマラソン」実施にいたりしました。企業からうらほろ楽舎に転職された汰木さんを中心に実行委員会を構成、委員長は副町長が担われました。

自治体職員+町民・高校生のボランティアも含め、楽舎に集う都市住民と協働で大会を運営させていただきました。「うらほろマラソン 2022 について」は、後ほど、ぜひお読みいただけたらと思います。

「うらほろマラソン」では高校生も積極的に関わってくれました。実際にキッズチャレンジということで、「うらほろマラソン」では、小学生・中学生を対象にしたマラソンも実施したのですが、そちらについても高校生がサポートをしてくれました。

この「うらほろマラソン」で一定程度の収益が得られました。収益を使って還元するモデルを、つい先立ってコンサドーレ札幌さんにもご協力いただきまして実現することができました。スポーツを軸にしたまちづくり、陸上以外にも行い始めておりますが、その一つとして、サッカー少年団に所属する小学生と、部活動でサッカー部に所属する中学生を連れて札幌に赴きまして、コンサドーレの試合・練習を見させていただきました。その旅費にマラソンの収益を充てさせていただきますいております。

今後、このような稼ぐ事業で、先ほどお伝えさせていただきましたように、子ども達のスポーツを通じた学びを先生だけに頼らず支援していく、先生的な役割を持つ人材の雇用に、ぜひ稼いだお金を使っていきたいと考えております。

実際にこのマラソン大会を先導してくれている汰木くんの言葉です。8年間ロート製薬で仕事をしていました。最後は新人採用の人事担当だったんですが、自分に課題があるということで、企業では、与えられたことを処理する力を身につけることができた。でも自ら切り拓く力を身につけることにはなかなかない、この力を身につけたいという想いを持って、うらほろ楽舎に飛び込んできてくれ、汰木くんはずっとサッカーをやっていましたが、自分がやりたいと思うスポーツを軸に生きる力が育まれるはずだということを考えながら、楽舎でスポーツプロジェクトを担っていただいています。

二つ目です。次世代に繋がる社会づくり、協働のアプローチ。こちらは東武トップツアーズという旅行会社と十勝うらほろ楽舎の協働事例でございます。企業からの出向者と町民の連携で新事業を開発しております。全国の高校生を対象に、浦幌町をフィールドにした SDGs 教育旅行プログラムを作って運用をしているところです。実際に出向者1名を十勝うらほろ楽舎に東武トップツアーズから派遣していただいています。現在は浅野佳奈さんという27歳の女性が、水戸支店に5年間勤務した後に十勝うらほろ楽舎に出向されています。人々の温かさに触れつつ、自ら成長を感じる日々だと言ってくれています。

送り出してくれた企業の浅野さんの上司の話です。教育プログラムの開発を統括しております。樂舎のある浦幌は、社員教育にも適した場であり、社内公募制度など新たな社内の仕組みを導入するヒントを得られる貴重な場だという評価をいただいているところです。

こちらが浅野さんの先輩である、前回出向されていた熊谷さんの話・言葉でございます。「仕事に対する意識が変わった。」「大変だったけど楽しかった。」「みんなで協力する掛け算が身につきました。」東武トップツアーズに戻り、新しくできた社内公募制度に応募して、今は地域、地方創生の仕事を沖縄でされています。樂舎で学んだことは、他ではできない無限大の力になったと評価をいただいているところです。

少し東武トップツアーズの事例をまとめてみました。企業版ふるさと納税を活用させていただいております。企業としての節税にも貢献できていると考えております。実は浦幌で開発したプログラムを既に恩納村ですとか、北九州市とか妙高市で展開されております。東武トップツアーズさんは旅行会社ですが昨年度、過去最大の黒字になりました。様々な社会改革を行っている企業さんだと思います。コロナ禍で働き方改革を実現する社会改革の糸口も浦幌から発見したと、おっしゃっていただいています。また育つ出向を我々も発見させていただきました。広い視野を持ち企業の未来を考えられる社員の育成に効果的だと改めてこの枠組みを我々も実感している次第です。

ここまでをまとめてみました。次世代に繋がる社会づくりの大人達の関わりは様々な協働を生み出すきっかけになり、さらには持続可能な社会への大人達の当事者意識を育むきっかけになっています。コロナ禍は予測困難な時代、社会を先取りしたチャレンジ期間だと改めて思います。そこでの協働で行われる事業の創出は、学び多きアプローチです。正解がない、すべてが正解の中で、異なる意見に耳を傾け、でも傾けすぎて全てが前に進まないことにならないように、本質を見抜いて次世代に繋がる社会づくりに寄与できる判断ができる、洞察力が身につく貴重な機会だと思います。

次世代に繋がる社会づくりへの協働のアプローチが、関わりを持つ企業や組織自体の生きる力を育てているのではないのでしょうか。

改めて、資料を抜粋させていただきました。「OECD 教育 2030」ということをご存知の方も多くいらっしゃると思います。「生き延びる力」ということで、国際的な経済協力開発機構が、このようなことを提言されていた訳であります。

では、生き延びる力をどう提示されていたでしょうか。OECD が定義する「生き延びる力」では、「新しい価値を創造する力」「緊張とジレンマの調整力」「責任を取る力」とあります。まさしく今回のコロナ禍を想像すると、これらの力があればもっともっといろんなことが乗り越えられてきたんじゃないかと察する次第でございます。こういう力が今の十勝うらほろ樂舎がある浦幌町では身につくのではないかと。出向してくれている社員、そしてこれに関わる様々な立場の方達がこういう力をつけるきっかけになっているのではないかと分析しております。そこに「うらほろスタイル」の礎を持った中高生・若者も巻き込んでいきたいというのが本音のところでは。

実際にこれからの展望ということでもまとめさせていただきました。浦幌町との協働構想、新し

くこのような枠組みで進めていきたいと思ひます。

浦幌町の第4期まちづくり計画があります。町の最上位計画であるまちづくり計画の中に既に「うらほろスタイル」そして樂舎が協働で取り組む十勝うらほろ創生キャンプが位置づけられております。我々が行政と違つた事業を別々にやるのではなくて、我々が叶えていくことはあくまでも町の最上位計画であるまちづくり計画に寄与していくという高い目標を掲げながら、そこに企業や都市住民を巻き込んでいきたい、そこに次世代人材である中高生を巻き込んでいきたいと思ひます。その巻き込まれの中で、恐らく本質的な連携の中で、中高生は与えられることなく自ら切り拓く力、自ら判断する力を身につけていくのではないのでしょうか。

最後に、少し私のことを紹介させていただきます。30年前に十勝浦幌町に移住をしました。「北の国から」に憧れて北海道に移住をして、念願の漁師にならせていただきました。不安定な収入を補うために水産加工品のネット産直を始めて成功させていただきました。しかし転覆事故に遭ひまして、生き方を180度転換することになります。未知の領域である教育・まちづくりにチャレンジして今に至ります。

まさしく、私自身が30年間の VUCA 状態、予測困難な時代の中で生き抜いてきたのかなど改めて感じている次第です。学ぼうとして学ぶのではない、次世代に繋がる SDGs 貢献を地域で実践することこそ最大の学びではないのでしょうか。一緒にワクワクしながらたくさん失敗しながら、浦幌町民そして浦幌に集まる方達と一緒に予測不能な困難を楽しんでいきたいと思ひます。そしてそこに、「次世代に繋げたい」と浦幌に集まりワクワク活動する大人達の生き方に、中高生に触れてほしいです。自身の未来を考えるきっかけを見つけてもらひ、関心のある事業から関わりを持っていただく、そんな展開をこれから進めていきたいなと思ひているところでございます。

私からは以上です。あとの資料につきましては、参考資料ということで用意させていただきました。ぜひご興味をもたれたらお読みいただけたらと思ひます。よろしくお願ひいたします。

あと、配らせていただいたクレヨンです。こちら先ほどご紹介させていただきました新たな協働の形で企業人の方達と作らせていただいております。現在ロート製薬に勤めている方が中心になりながら、実際にいろんな営業・マーケティングを行いながら、販売に努めております。これらの売り上げについても同じく持続可能なまちづくりに貢献していきたいと考えているところです。是非とも興味を持たれたらお買ひ求めください。よろしくお願ひいたします。私からは以上です。

## ○鈴木知事

はい。近江代表理事、本当に時間が限られる中、今お話いただいた以上に様々お話をさせていただきたいことがある訳でございますが、まとめてお話をいただきました。本当にありがとうございます。

それでは、意見交換の方に入らせていただきたいと思ひます。教育委員の皆様から、ご意見を近江代表理事のご講演に対しますご質問なども含めまして、ご発言をいただければと思ひま

す。委員の皆様全てにご発言いただければと思っております、青山委員から、川端委員、大鐘委員、そして、最後に橋場委員の順でご発言いただければと思います。それではまず青山委員からお願いいたします。

## ○青山委員

はい。まずご講演くださった近江様の話、本当に感動しました。小学生・中学生・高校生のみならず、近江さん達大人や企業のトップの皆さん方が、やはり楽しそうにワクワク前を向いて活動をされているから、取り組まれているから、それが子ども達に伝わって、きっとこれからも人口が増えていくと思います。ぜひモデルになっていただきたいと思います。

やはり大人が本気で楽しむとか、前を向くとか新しいことにどんどんチャレンジするという姿を子ども達が見てるんじゃないか、そんなふうに思いながら、ご講演を聴かせていただきました。また、もともとこのクレヨン、存じておまして、1歳になる甥っ子にあげたいと思っています。

地域学校協働活動である地学協働で地域と学校が協力しあってお互いがより良いパートナーとして、連携とか協働する活動を積極的に展開している北海道教育委員会の取組は、本当に大変有意義なものじゃないかと思います。子ども達にとって地元のことを詳しく知ることができる。その学びがあって、地元の企業が身近に感じられる豊かな教育だと思います。

地域にいらっしゃる高齢者の方、それから大人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体、機関等の幅広い地域住民からの参画で、子ども達の地元に残って働きたいとか、生まれ育った場所で活躍したいと思える郷土愛が育まれるものと思います。地元で学ぶことの意欲にも繋がると思いますし、地元に誇りを持てることにもなると思っています。

子ども達も参画されている大人達に意見を言ったりという、そんな機会なかなかありませんね。また、たくさんの意見を聞かせてもらうこと、成長できる場所であって、地域住民や企業との繋がりが持てる貴重な学びの場だと思いました。

そして先ほど出てきましたが、自己効力感も養えると思いますし、自己肯定感も高まっていくんじゃないかと思います。これによって、困難なことにも打ち勝っていける精神力の醸成にも役立つものと思います。高校生が地域に出て行って、地域課題の解決に向けた学習を行うといった授業の企画、素晴らしい経験体験となっていてうらやましいです。私の時代はありませんでした。「北海道 CLASS プロジェクト」による特産品の開発や商品のパッケージ考察、本当にすごくたくさん種類があるんですね。教育長、もし可能だったらですね、高校生が開発した商品だけを集めて、買えるようなアンテナショップがあったら、私はまっ先に買いに行かせていただきたいと思っておりますので、ぜひ特設ショップの開設をご検討いただきたいと思います。

また、今回地域コーディネーターとして松岡さん、お話ありがとうございます。大変感謝しております。

この活動を継続いただきたいと思っております。たくさんのご尽力ありがとうございます。これからもご指導よろしく願います。より一層、これからも学校教育において、社会と連携・協働した教育活動を充実することが重要だと思います。地域を学ぶ、地域で学ぶことで、郷土愛を

育て生まれ育った場所で働きたいと思える次世代の人材育成、人材教育、これからも期待しています。以上でございます。

### ○鈴木知事

ありがとうございました。

それでは続いて、川端委員お願いいたします。

### ○川端委員

はい。川端です。松岡さん、近江さんありがとうございました。大変勉強になって、資料いただいた時点で見えて、こっちの方がワクワクしてしまってですね、一緒にやりたいというような内容がたくさんあったかと思います。

「北海道 CLASS プロジェクト」高校生がいろいろ関わっていくこと。また、この日本の中で「マイスター」という言葉、専門職ですね。いわゆる専門職という位置付けが、非常に低いのではないかというのを私自身はずっと感じていましたが、そこを特化してこのようなプロジェクトが組まれていることを非常にうれしく思っています。

私達世代、青山さんもおっしゃいましたが、もうちょっと上になりますが、やはり高校生、若い人達が大人に何かを意見して形にするのがタブーのようなところがあって、もしかしたらその当時もいいアイデアを持っていた人はたくさんいたかと思いますが、聞いてもらえなかった。それがやはりこういう時代になって、地域を愛するいろんなアイデアを持って一緒に前進する、大人も子ども達もです。一つのもをつくり上げるということで、自分達の想いが形にできたりとか、達成感から来る、湧き出てくるものがすごく有意義なものではないかと思っています。

たまたま昨年、学校視察で私、大空高校に伺いました。コロナ禍であって、やはりお花とか作っても売る場所がなくて廃棄されるところで学校が引き取って、授業として色づけてですね。私、どうやって色つけるのだらうと思ったら、ちゃんと試験管につけて色を吸わせるところから始めて、フラワーストラップを作っていたりというのを、実際に工程を見させていただいて買ってまいりました。

そういう授業、自分達のやっているものが形になって地域に貢献しているというものを実際見たりすると、やはり愛着を持ってこれからの授業を進めていけるかを感じたところです。

もちろん、今日の発表の中でも、たくさんの学校がいろんなものに取り組んでおります。イベント開催時だけの販売なのかもしれませんが、店頭販売だったりネット販売、道の駅は通年だと思しますので、どんどん発信していただいて、本当に高校生と一緒にコラボしているのを前面にアピールして販売をしていただいたり、私達ももっと知るチャンスがあったらいいと感じています。

実際、たぶん子ども達はどのぐらい販売されて、ポップを変えたらこうだとか、パッケージを変えたらこんなふう売れた。同じ商品だけど売れたということも進化していけるころだと思しますので、ぜひそういうものも統計をとりながら、今後も進めていただきたいと思います。

もう一つ、浦幌ですね。これだけのことをたくさんやられていて、素晴らしいなと思って、私はそ

の中で「非効率からの学び」と、「何が正しいことなのかわからない」「ある意味全部正解」という言葉に大変惹かれました。「非効率からの学び」、私はある意味スポーツ人でもあります。が、効率良いトレーニングというものを今大変言われますが、それだけでは勝てない。この中にいらっしゃる方、ほとんどの方が「ロッキー」という映画見られたと思いますが、シルベスタ・スタローン是非効率的なトレーニングをして勝ちました。あれを思い出していただいて、同じように効率がいいからすべてが成功することではないと、ずっと私自身も思っていたのですが、その言葉が出ていて大変興味深かったところがあります。

もう一つ「うらほろマラソン」ですね。開催をして終わる、ただこれだけだといろんなところでマラソン大会をやってらっしゃると思いますが、子ども達が参画していくために高校生と一緒に走っていたり、また、マラソンが終わった後もそれを継続的に行っていくことに対して非常に興味を持ちました。

感じているのは北海道の子ども達の体力作りですね。非常に体力が少ない、低いと言われてますから、今後は道内とかに広げていきたいとお言葉が書かれていますので、このような事例をぜひ広めていただいて、子ども達の体力づくりの町とか。やっぱり1人ではできないことが多いと思いますので、アイデアを発信していただけたら大変うれしいと感じたところです。

個人的にはゴールピクニックのピクニックのところだけ参加したいなってちょっと思ったりもしたのですが、本当にいろんなアイデアがありますので、ぜひいろんな場面で地域を愛しながら、もしかすると、一度外に出るから分かることも企業から来られた方は感じていると思いますので、その辺も含めていろんな発信をしていただけたら大変ありがたいと思いました。以上です。

## ○鈴木知事

ありがとうございます。代表理事からは最後にまとめてお話をいただきます。

続いて、大鐘委員からよろしく願います。

## ○大鐘委員

はい、大鐘でございます。よろしく願います。

何より地域コーディネーターの松岡様、十勝うらほろ楽舎の近江様、お忙しい中ご報告・ご講演いただきありがとうございました。勉強になりました。

最初に道教委の取組について、コメントをさせていただきたいと思います。

「CLASS プロジェクト」ですが、学校に着目しますとこれまで学校の教育機能は学校の中で収まっていたのですが、それが地域に出ていくことによって複合的な関係が生まれて、それが問題解決に繋がっていったということが学校の新しい機能として、注目できるのではないかと、学校がそういうことができるのだという発見に繋がるのではないかとと思います。

具体的には、まち・ひと・しごとを通して生まれた探求的な学びが地域の人材育成や地域コミュニティの活性化に繋がっていると言えると思います。それは学びというのが学校の中から外

に出てきて社会化されて、その学びの仕組みが地域に浸透していけば、地域は学習者として、主体化されていくのではないかと思います。

一方の行政面では、プロジェクトを通して教育行政と首長部局が連携して、新しい行政機能を生み出していると考えられると思います。新しい行政のあり方として注目したいと思います。

特に、結果を作り出すことよりも、関係をつくり出すことが目的であるというところに、社会教育の蓄積が発揮されているのではないかと感じます。行政の縦割りを超えてどこにも属していなかった新しい業務が作り出されて、新しい視点による問題解決が期待できると考えています。

高校生による商品開発ですが、高校生にとりましては地域を再認識する大きなきっかけになると思いますし、それによって高校生が地域住民として自立していく、主体化されることに繋がっていくと思います。

商品を通して経済活動に参画していく経験が、地域の産業経済活動を見る視点を形成して、ひいてはキャリア教育に繋がっているだろうと思います。地域住民にとりましては、高校生が地域の資源を改めて顕在化してくれたことから、地域を再認識するとともに、地域の子も達の価値を再認識できているのではないかと思います。

それから、地域コーディネーターの松岡様のご発表についてですが、課題をしっかり捉えて、それを少しでも解決しようと前進している姿は非常に感銘を受けました。

学校での理解というか、協力というものが一つ課題になっていたようですけども、例えば、毎月行われているプロジェクト会議にですね、学校の先生だけではなくて、3つの学科がありますので、それぞれの学科の生徒を会議そのものに参加させた方が私はいいいのではないかと思います。生徒の方が先行すると思います。生徒が先行していい結果が出ると、先生方は動くと思います。どうかご検討いただきたいと思います。

最後になりますが、「今、十勝うらほろで起こっていること」ということで、協働基盤になっているうらほろスタイルは教育学習の仕組みがそこにしっかりつくられていると思います。それが地域に浸透して、地域人材を作っていくってそれが関係人口を増やす土壌になっていると考えています。

特に、先ほど驚きましたのは、地元で高校が無くなってはいるのですが、地域住民としての高校生がいるというところに着目して、教育課程外で高校生の部という、部活動、部を作って、それが活動して小学校・中学校に下りていってという連鎖ですね、世代から世代という連鎖を考えると文化になっていると言えるかと思います。

現在よりも未来を志向しているという点は現在に固執しない、これは、近江様もそうですが、外からの新しい方の移住者の視点が有効に働いているからではないか。その視点を重要する姿勢も北海道にはあって、それは北海道的ではないかと改めて感じたところです。

いずれにしても、子どもは未来に向かって育つというのは当たり前のことですが、そのことをまともに取り上げると、やはり未来中心というのが当然の秘訣になるのかと、子どもを中心とし大きく感じて感銘を受けました。以上でございました。

## ○鈴木知事

ありがとうございました。

それでは橋場委員お願いします。

## ○橋場委員

橋場でございます。松岡さん、近江さんどうもありがとうございました。

今日は大変有意義な時を過ごせたと思います。

近時、ニュースは朝テレビをつけても何かとどよんとした、あまりハッピーなニュースが少なく、ちょっと気が落ち込んでいたのですが、何か未来が見える、久しぶりに明るい話を伺って私も元気になりそうです。

取り止めもなく思いつくままにお話します。一つは、私の出身地である北見市には工業高校がある訳ですが、ある自動車会社の社長をやっている親友がおりまして、進学を目指す工業高校にするのか、技術を獲得してもらって地元に残ってもらう学校を目指すのかというところが、10万都市にとって、大きな分岐点になると思うという話をしておりました。学校にはいろんな学校があつていいと思います。やはり上の学校を目指して故郷を出ると一つの選択もありましょうが、やはり技術をつけて、そこで町のために頑張ろうという人達もいないと困るというのが企業の方々の本音なのだと思います。そんな話を聞きました。

還暦を迎えた私の同期でも、東京から北海道に来たいのだけれど、なかなか自分のやりたい仕事がないので、東京でずっと過ごす人もいます。浦幌町のことは、前任の田澤教育委員から詳しく聞いていまして、浦幌町に帰りたいけど合った仕事がないと。話の中にもありましたが、COVID-19 という時代が先取りするチャレンジ期間ということで、ICT があれば、浦幌にいても自分のやりたい仕事ができるという方向で田澤委員は一生懸命頑張っておりました。まさかですね、30年前に一度北海道を出た方、または北海道を知らない方が北海道に居を移して、自分のやりたいことをここまでやられている方がおられることに大変感銘を受けました。

「北の国から」の話が出ましたが、父親役は田中邦衛さんでした。純とか蛍がちっちゃい時の第1回目から、私は大学1年生の時に自分の部屋で見えていまして、やっぱり北海道いいな、なんて思っていました。ずっと。

就職の時も、企業に入って関東、関西で働くのか、それとも北海道で自分の好きなところで働く仕事に就くのかということで非常に悩みました。悩んだ末に大変苦勞をしたのですが、今の仕事をしております。

浦幌に帰って来たい、当別に帰って来たい、という1回故郷を出て行った人間もたくさんいると思いますね。もちろん学校を卒業後そのまま故郷に残る方もおられるし、浦幌町だったら近隣の学校に行つて戻ってくるパターンもあるでしょうが、一度東京なり大きな町を見てそれで戻ってくる方が増えている。これはすごくうれしいことです。町の人口が増えていると伺いました。たしか利尻町でそういう話を聞いたことがあるのですね。子育て世代が多く戻ってきていて、人口

が増えているという話を聞きました。浦幌で30人も増えているのは大変びっくりしました。これはなぜかという、やはり受け皿があって自分の住める場所がそこにある。しかも、今は利益追求にしてもすごく短い期間でどれだけ利益を出すかというショートスパン的な考え方で動くことがよいこととされてきましたが、実はそうじゃない。SDGsの発想のように長い期間を考えて何が一番幸せなのか、昔のブータンのような、幸せって何だろうということをゆっくり考えられる。そういう場所をつくっていただいているお2人には本当に感激しました。

今日は大変いいお話を伺いました。どうもありがとうございました。

### ○鈴木知事

ありがとうございました。

各委員の皆様から様々なご発言をいただきましたが、ここで近江代表理事から一言、コメントをいただければと思います。

### ○近江代表理事

委員の皆様ありがとうございました。大変勇気をいただきました。また明日から頑張っていけそうです。本当にありがとうございます。

外に1回出るということをお2人の委員の先生からお話がありました。まさしくそうだと思っております。愛着を育んだ子達は当然、地域にずっと居たいのですが、地域にずっと居たらダメだと思えます。あえて外に出て、外に行き、外を見ながらまた地域に戻って来てもらうことが大事だと思えました。

冒頭、社会動態の話をしていただきました。若者が今すごく集まっている浦幌です。そういう若者達と地域出身の若者達がコラボレーション。まさしく CLASS の中でありましたコラボレーションをし始めていると思います。

本当に優秀な若者が今、浦幌に外から集まってきておられて、一つの事象として紹介したいのですが、彼は京都で大学院を卒業した後に、企業に勤めるのは将来がないと、思い込んでいたのです。その中で、浦幌町でロート製薬の汰木君と出会います。こんないい会社があるんだ、と思ってロート製薬に就職を果たします。企業は、こういう人材が欲しかったんだみたいなところで。恐らく、若者が集まってきている浦幌に、いろんな企業がこれから優秀な人材を採用したいという思いを持って関わってくることもきっとあるのではないかと。そうすると、もしかしたら浦幌で育った子達が、浦幌に関わっている様々な企業と出会い就職するみたいなことも、実際出てくるのではないかと感じたりもします。実際にうらほろ樂舎で若者達が仕事をしてくれていますが、逆に我々のところにいたら身につけられない力もたくさんあるのです。そういうところを逆に出向という形で、例えば行政や企業に送り込んで、また戻って来てもらうみたいな、こういう人の流れもこれからは進めていきたい。まさしく外に積極的に出していきたい。そしていろんなことを学んで地域が次に繋がるために、次世代の人材が活躍する場を作っていきたいと思えます。

最後に、「次に繋げる」「次世代に繋げる」という言葉、先ほどの教育長の発表の中でも、たくさんのキーワードで出てきたと思います。委員の皆様からも出たと思います。私は二つあると思っていて、次の世代に繋げていくために二つ。

一つは、次の世代が引き受けて良かったと思える町をつくっていく。われわれの大人達の豊かさだけではなく、次の世代が引き受けて良かったと思えるような町をつくっていく。これが浦幌でまちづくりに関わる上での重要なキーワードにしております。

もう一つは、次の世代が次世代を生きていくため必要な力を身につける。VUCAという言葉そして10年後、20年後予測困難な未来が様々な教育行政の変革を求める背景にあると思います。未来を生き抜くためにはどんな力が必要なのか、それを身に付けていくフィールドが浦幌に少しずつできつつあるのではないかと思います。次世代に繋げることを大事に思う大人達が真剣に活動する、その活動に学ぼうとするのではなく関わっていく中で、きっと結果として学びを深めていくことができるのではないかと改めて感じました。

本日はどうもありがとうございました。

### ○鈴木知事

近江代表理事ありがとうございました。

それでは倉本教育長からお願いをいたします。

### ○倉本教育長

本日は本当にありがとうございました。まず、近江代表理事のご講演では、樂舎が進めている持続可能なまちづくりや新たな協働スタイルの取組に関し、まちづくりと学びは一つのものなのだと感じたところであります。大変貴重で有益なお話をお伺いさせていただいたと思います。

中でも、子ども達が夢と希望を抱ける地域を大人達との協働で築くという理念を掲げられております、その「うらほろスタイル」、我々も「地学協働」を先ほどご紹介させていただきましたが、こうした理念が大事な訳です。

松岡コーディネーターの話の中にありましたが、学校の先生達がなかなか乗ってくれないというのは、いろんな要素があって、やりたいのだけどやっぱりやり方がわからなかったり、やりたいのだけど今までの経験の中になかった部分があります。そういう意味でいくと、積極的にいろんな外の人達の繋がりを学校の中で持つのは本当に非常に大事だと思います。

今日、いろいろとお話いただいた点、道教委として参考にしていきたいと思っております。引き続きよろしくお願ひしたいと思います。

それから、学校と地域が連携した取組を充実させていくためには、地域との繋がり、松岡さんからいろいろお話いただきましたが、コーディネーターの方々の存在がすごく大事だと思っております。

当初、先生が消極的だったということで、大変ご苦労いただいたと思いますけれども、大鐘委員からもありましたが、実は生徒がのってくると、学校全体が勢いがつきますので、一度勢いが

つくど組織力が発揮されると思います。

我々もコーディネーターの方と一緒に、さらに取組を進めていきたいと思っております。引き続き「CLASS プロジェクト」のコーディネーターの方々と連携をしながら、また、そうした方々の人材の育成・発掘にも努めながら、「マイスター・ハイスクール」の取組の成果ですとか、学校を核とした持続可能な地域づくりに繋げていきたいと思っております。

我々は、これからも北海道の中で、どういう人材をつくっていくのかが大事になります。大人と子どもが世代を超えて協働していくことが大切だと思っておりますので、今後とも子ども達が地域づくりに積極的に参加できるような地学協働の取組の一層の充実を図っていききたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

### ○鈴木知事

はい。教育長ありがとうございました。ちょうど時間でございますが、私の方からもお話をさせていただきます。

本日は松岡コーディネーター、そして近江代表理事、お忙しい中すばらしいお話をいただきまして、改めてありがとうございます。

私、以前も総合教育会議で話したかもしれませんが、夕張市長として8年間仕事をさせていただいた時に、こんなことがあったんです。

まちづくりをみんなで考えようという場に、高校生に参加していただいてお話をした時、そういうふう考えたのだと思ったのですが、我々大人サイドからすると、高校生にこんなことを考えていただくのはなかなか難しいのではないかと思っていたり、また、高校生側の発言でそうなのだったのですが、夕張の破綻は非常にネガティブな話なので、ご家庭などで話をするにはある意味避けていたため、大人達がどういうふうこの町について考え、いろいろな熱い想いを持っているのかが正直わからなかった。

しかし、高校生がまちづくりの場に参画して、大人達も非常によく考えているということがわかった。大人の方も、施設の再編にあたって、どういう機能が必要かについて子ども達に意見を聞いたのですが、大人が考える以上に現実的かつ、自分達が使いたい機能などをいろいろ考えていて、お互いが上限を決めていたため、なかなかそういう場面をつくれなかったということがあったのです。

ですので、学校の内外でそういった場面をつくっていくことはすごく大事だと思ったところがございます。

それと、私もいろいろ地域を訪問させていただく中で高校などもお伺いさせていただいて、今日、教育長からもご説明があったとおり、北海道は高校生の商品開発、畜産や農業の関係など非常に多くの高校発の商品がありまして、青山委員から「アンテナショップ作ったら私行きます」というお話がありました。今、アンテナショップは「どさんこプラザ」をやっていますが、実は北海道は日本一売れています。有楽町店で。今どんどん増やしていますので、高校生のそういう知恵、地域との協働で作った商品。こういうものを日本で最も発信力のあるアンテナショップを

北海道は持っている訳ですから、そういったところで展開をしていくのも、今日、ご発言があったので、教育長には引き続き検討していただけたらいいのではないかと思いますし、それともう一つ、近江代表理事から企業版ふるさと納税のお話や、ふるさと納税個人の話がありました。これは両方とも日本一はどこかと言ったら北海道です。個人のふるさと納税も集まっているし、企業のふるさと納税も集まっているので、そういう日本一の魅力を上手く組み合わせていくことによって、高校生また子ども達の人と出会って、さらに人材を北海道に取り込んでいくことの大きなきっかけにしていくべきなのではないかと思っています。

今回、総合教育会議でございますが、人づくりはまさにまちづくりであり、地域づくりであるというお話だったかと思っていますので、今日いただいた様々なアドバイス、ご助言を踏まえて、どうやって行政側、教育側もみんなのこういった前向きな想いを形にしていけるのかということを考えていく必要があると思います。

ぜひ、委員の皆様、そして教育関係の皆様にも引き続き、そういった視点でもご協力をいただきますよう心からお願い申し上げます。

最後に、本日ご参加いただきました皆様に改めて深く感謝を申し上げます。時間超過して大変申し訳ございません。

これで、令和4年度第1回北海道総合教育会議を終了させていただきたいと思います。本日は本当に皆様ありがとうございました。